つ、賤女の喜ひ如何計りぞ、物に例へん樣もなく、直ちに我同盟國なる佛國大使を訪ふて、日本に夫の安否を尋ね給へと請ひ侍れと。大使は返信を得るの望なしとし、斯る問答は無用なり、思ひ止まり努々心を勞する勿れと諭されて、賤女が請をぞ斥けらる。然れど大和の武士は仁義の心深く恩愛の情を汲み、强きを拆き弱きを助くる眞情は、其公戰に勇なるに引替へて、捕虜の優遇と傷者に對する注意にて遍て知られ侍りけり。哀れ賤女が煩悶心勞を察せられ、所天の安否を知らしめ給へかし

と、佛文以て水莖の跡清く、物の見事に書綴り、心中限りなきの情をぞ訴へける理りせめて憐れなり。我大臣は之を聞き、惻隱の情禁じ難く、夫人展轉の思を慰めんが爲め、遍く有司に命じて情報を求めしむ。內兩軍を極め、外友邦、然れど海事渺茫情定め難し。忽ち聞く虜中四名あり曰く裕曰く納曰く披倫四名共に大尉の部下にありて其負傷戰死の狀を目擊す。是に至りて事實判明蔽ふ可らず轉々有司に敎へて慇懃に報ぜしめ、終に臨んで眞情更に語を寄す

我及ぶ限りの手段を取り得る所の情報斯の如し、然れども海上の激戰は事情錯綜意外の出來事ゞとあるなきを保せず。良人或は貴國艦隊の救助す

る所となり、尚ほ此世に在すやも計り難し、貴國軍務當局にも御聞合せあらまほし。其れはさて措き良人の率ひ給ひし「ステレグスチー」の艦員が我優勢なる艇隊に双向はれ、最後に至るまで奮戰力闘天晴れ大國艦隊の名譽を發輝せられしは、豫ての御薫陶左もこそと思ひやられて慕はしく、最終の望は如何あらんか知らねども、今貴女の斯の如き良偶を失はれしに對しては、茲に最も深厚なる哀悼の情を表せざるを得ざるなり

と、聞くならく是れ東方敵國の信、九華帳中紅涙新なり。噫々戰國の例とは云ひながら偕老の契り半に破れ、春風桃李花開くの朝、秋雨梧桐葉落るの夕、獨り夫人をして空閨を守らしむ、閑花離亂終に情なく、雛去り空く留む虞氏の涙、賤の緒環繰り返し昔を今に爲す由もなく

桃花春水生前夜　楊柳秋風憶故年

四幸吉氏の依頼に應じ作るものなり、記事は明治三十七年七月十一日の時事新報にあり、発作淫墨敢て當らず請ふ諒せよ

琵琶新曲 **温折錄** 畢

第十三卷　武士の情

明治三十九年十一月十日印刷
明治三十九年十一月廿日發行

定價三拾五錢

著作權所有

著作者　田尻稻次郎

發行者　平本正次
東京市神田區駿河臺西紅梅町十番地

印刷者　天野耕一
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　秀英舍第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京神田駿河臺お茶の水角
電話本局二千九百九十九番
光融館

97
320

光融館出版書籍大賣捌所

東京神田同
同同同同同本同同同同日同京同同同同芝芝同
郷橋橋本三田

東上岡三有武中渡田盛森文岡林大東北良服春鴻福佛
邊中春明分江崎屋原倉書海隆明祥部書盟島敎
京田崎省斐藏庸書

堂屋屋堂閣屋堂店堂屋店堂館堂店平田堂店堂館屋社

麻淺下牛小名同同同同京岐同同同大同廣同博
布草谷込川石古屋都二三五六阪備後油小路條條條條條阜町
多島

森淺玉盛杏鷄川永其文郁貝出興顯爲法稍洗積
江倉水文文聲代東湖中光文葉雲寺道敎藏法加賀善心善
書書店屋屋堂堂堂店店堂院院院館館助平岡書書書

所拂宮大籠書販出當讃光

同芝芝同同同同京同口同同同同同 本同同同同同同東 宝
三 本 神
田 橋 李 鄕 田

佛器浮存服貝北東大林岡文保篠田淺中武台 二同上東
筏島盟軍 部 明降力 台 崎 江 呉明 存中 之 庫黄麦者崎田宝
市 市 原 分 市 市

雷号赤雷号雷雷雷号雷号田雷号雷号号雷雷号号雷雷号号雷雷

博同鹿同同大同同同同同同京畦同同同名同小下下浅風
備 油 都
稲 六五 小三 台 台
乡 島 町四候條 路條條帝 宝 川巳谷雷布

仙沈仙加吉 法 厚雷興出以能文其赤川宮谷篠 王浅桂
雷心 雷賀国 道鈴 子 栄 文光中 東通 尋 文之水谷 二
雷 市 文市 文市 市市市市 蛇法 市市市市 市代 市

市房市市助 高篠院院宝院雷雷雷市市雷雷雷号号雷号雷

仙仙同同横浜谷同上新三水長富高谷同同同高熊岡人

器雷 雷面本 平浜條房岡山岡霞 半本山分

富非必勉台 今宗 河西北通西日中學宇中日薔薇長武中
嶋 女鹿島 宝 雷 日村黒田 名村 市黒 大嶋内曼
雷 市 宝 陽高光 雷 六日 市 原三 長衛
雷市雷雷雷雷市雷雷市市雷市雷雷雷雷雷雷雷雷雷雷雷雷雷雷

074547-000-5

97-319

温折録

田尻　稲次郎／著

M39

CEJ-0003

97
315